

近代龍澤寺史と山本玄峰・中川宋淵

—— 今後の調査研究のための論点整理として ——

小田直寿

はじめに

龍澤寺は豆州三島にある「白隠の古道場」である。近代においては、「白隠の再来」と呼ばれ終戦工作にも取り組んだとされる般若窟・山本玄峰（一八六六〈慶応二〉—一九六一〈昭和三二〉年）が復興・住持するなど、近代妙心寺派の展開のなかでも特異な位置を保っている。現在、国際禅学研究所は龍澤寺の依頼協力のもと、所蔵資料の調査を行っている。筆者も研究員としてその調査に従事しているところである。

調査においてはじめ筆者に宛われたのは山本玄峰の法嗣蜜多窟・中川宋淵（一九〇七〈明治四〇〉—一九八四〈昭和五九〉年）の俳句作品の評価であった。一見、文学研究の視野と方法をそのまま適用するのがよからうかとも考えられた。しかしながら、「俳禅一如」と呼ばれる作風である以上、まずは宋淵の本質をなす禅僧としての全体像を把握し、その上で俳句をめぐる論点をも把握する段取りを取らなければならない。

そこで宋淵や遡つて玄峰について記された諸記事を渉獵し、宋淵の生涯をひとつの年表に纏めるとともに、周辺情報を一纏めとする作業に取り組んだ。基礎文献としては、中川宋淵については遺稿集『法光寿』、法話集『空華』、思出集『蜜多海月情』、追想・尺牘・年譜『蜜多余香』が存する。また山本玄峰については法話『無門関提唱』、伝記・回想集『玄峰老師』、回想集『回想 山本玄峰』等が存する。これらをもとに周辺情報を浚うことで基礎年表を作成した⁽¹⁾。

この作業の過程で中川宋淵の生涯がより明確になるとともに、その師である山本玄峰の圧倒的影響やその周辺の人々の人間的動向がおぼろげながら見えてきた。それは日本の近代史の中心動向にきわめて近いところで活躍する禅宗の動きであり、世界的な布教の様子であり、普遍的な人間教育やその挫折の様子であった。これをどのようにまとめるかが課題である。近代禅の歴史的研究である以上、禅学が基軸となることは当然であるが、斯学への立ち入り方も様々にありえよう。そこで筆者自身の研究上の立場に遡り、本研究の問題意識を明確化しておきたい。

筆者は、歴史学・哲学畑の出身である。主体的な問題意識はよりよい人生と社会の探求にある。この問いへの一環として、二〇二四年には教科書裁判（一九六五（昭和四〇）―一九九七（平成九年））で知られる家永三郎の思想像を解明する『家永三郎の思想史的研究』を刊行した⁽²⁾。また現実に根差して歴史動向を見極める作業として、現在、世界史と地域史とを地域の論理ひいては差別問題とその超克まで含み近代資本主義システムとの関係で相互展望する一書を刊行準備中である。

要するに筆者は二件、二〇年来の仕事をし終えたところであり、次の課題を模索しているところである。現在の筆者にとって根本的な課題は、人生にせよ将来にせよ、今まで以上により深い見極めである。この点

で理想主義者である家永は一種の参照軸としての地位を失わないと考えられるが、家永においても多少不十分な部分を存する美の問題、人間関係の問題、それに最も深い意味において真実を見極める目とは何かということの探求が改めて必要となると考えている。

そうした折、これまで学理の範囲で知るに留まっていた禅および禅学との機縁が生じたことは非常に感慨深い。この際そのもつとも優れた部分を学ばせていただき、ひいては御札を兼ねて些少ながら寄与したいと念願している。そしてその意味で、龍澤寺の非常に闊達な動向は大変興味深い。史料自身の示唆に導かれて研究を進める歴史研究の原則に沿いつつ、未来に向けて見出すべき諸史実を発見・定位していきたいと考えている。

事実、龍澤寺の研究調査には従来の禅宗史の枠組みを超えるかもしれない多くの論点を見出すことができる。俳文学的分析もそのなかの一つというべきであろう。そこで本検討においては、主要な論点を意識しつつ、龍澤寺と山本玄峰・中川宋淵を主人公としておおむね年次順に歴史的叙述を行うことを試みる。それにより近代龍澤寺史の概要を明らかにするとともに、今後の研究課題を解明・明確化することが本稿の課題である。

なお以下の記述においては、『玄峰老師』所収「玄峰老師略年譜」ならびに『蜜多余香』所収「宋淵老師略年譜」「海外布教のあゆみ」の内容については注記を割愛し、それ以外についてはすべて注を記載する。

一、龍澤寺の再建

1、近代龍澤寺の背景

龍澤寺をめぐる歴史的前提を概観するところから始めたい。とはいえどのように概観するかは問題意識そのものとかかわり一つの重大問題である。本論はそうした問題を観察提示するための基礎認識を固めることが目的であるから、ひとまず臨済禪とりわけ妙心寺派の宗門上の観点に従い、おおむね制度問題に絞って最低限の確認をするにとどめる。

さて近代妙心寺派史については、『妙心寺六百年史』『増補妙心寺史』が基礎文献であり、このほか『悲劇の宗政家前田誠節——臨済宗妙心寺派の近代史』が存する⁽³⁾。これらをもとに歴史的過程を追うと、おおむね次の通りとなろう。

そもそも仏教界全体にわたり、廃仏毀釈の影響を無視することはできない。さらに神道国教化政策が推進められようとしたが、浄土真宗の島地黙雷の尽力により破綻、その後は各宗派が自立のための組織形成と宗門自治に向かって進んでいくことになる。

臨済宗においては前年の黄檗宗分離独立を受けて一八七六（明治九）年には妙心寺派ほか八派が独立した。一八八四（明治一七）年の太政官布告により宗制寺法が求められ、翌年には妙心寺派初の憲章である「妙心寺派憲章」が定められた。その後は妙心寺派の議会が対立の場となる⁽⁴⁾。

また明治期には教区制度や学校教育の設立運営といった実績が徐々に蓄積され、明治末には海外布教の動きも出始めた。布教先は台湾、中華民国、満州、アメリカ、ハワイ等に及んでいた。なお戦時下には国策に

より臨済宗合同が進められたが、戦後すぐに再び独立した⁽⁵⁾。

宗門としては「明治以後の吾が妙心寺一派が最大の努力と犠牲とを傾倒し来れるものは教学と布教の二門なり」という⁽⁶⁾。ところで山本玄峰は「まともな人間は余人にまかせる。わしは世間から、あばれもの、やくざもののように見られている連中を世話する」と言っていたと伝えられる⁽⁷⁾。こうした人々の世界が、龍澤寺の歴史を形作る。

山本玄峰は、幼少期より生活の苦勞が絶えず、また柚人と交わり賭博を身に着け、眼病による半失明と四国行脚という波乱の前半生であった。その経験を通じて多くの人生経験をなしていたものと考えられる。こうした人物はひとたび立志すると、しばしば、常人には及びもつかないほどの深謀遠慮を示す。玄峰の生涯はそのような事績の蓄積そのものであり、その圧倒的影響のもと、法嗣・中川宋淵が育つのである。

2、龍澤寺の復興

白隠の古道場として、「白隠二大神足」のひとり東嶺円慈(第二世)や、山岡鉄舟に鉗鎚を施したことで知られる星定元志(第六世)の存在で知られた龍澤寺⁽⁸⁾も、大正期には荒廃していた。復興の経緯は『玄峰老師』龍澤寺の項⁽⁹⁾に詳しい。大正初年ころの老師であった翠巖宋密(第八世)が「坊ちやん育ちというか世事にかまわぬお方で、何かの保証人にされて他人の借金を背負いこんだり、不逞の輩に謀られてひどい目にあわされるなどのことつづき、経営すこぶる不振に陥つて寺は甚だしく荒れました」⁽¹⁰⁾ということであったと伝えられる。

龍澤寺復興の件は本山で問題となっており、はじめ京都臨川寺の間宮英宗に白羽の矢が立ったが、事情に

より英宗みずから適任者を物色し、玄峰が依頼を受けたという順序であった。玄峰の師見性宗般はじめ反対したがやがて承知、一九一四（大正三）年に七月下見の上、翌一九一五（大正四）年三月下旬、少年であった黒沢黙竜（のち東京都立川市砂川町林泉寺住職¹¹）を連れて正式に入寺した。当時龍澤寺の弟子は与五沢宋舜（？―一九四五（昭和二〇）年）・通山宗鶴（一八九二（明治二五）―一九七四（昭和三九）年。のち円福寺師家）であったが、いずれも別のところにいた。

当時は全くの荒れ寺で、本堂・開山堂・禅堂・陰寮は建っていたものの、「典座寮の隅に茶碗一ぱいほどの味噌の腐つたのがあるだけで、そこら一ぱい鼠の糞だらけ、屋根は穴だらけで雨天には室内でも傘をささねばならぬ、蒲団などもない」¹²状態であったと伝えられ、玄峰も座って寝るありさまであったという。周辺の若い衆も勝手に寺の物を持ち去るのみならず、薪にするつもりであったのか、山内の木さえ伐って持ち去ろうとするほどであった。玄峰の最初の仕事は同年五月ごろ、不動堂を裏山から現在のところへ移すことであった。

ついで禅堂を改修、白隠一五〇年遠忌において鎌倉円福寺の宗般、西宮海西寺の南天棒、多治見虎溪山の五峰無底の三老師を招いて三週間の接心会を行った。その際古い庫裡を改修することとなり、費用調達のため相国寺独山老師に染筆の寄進を依頼、白隠古道場であるからと快諾を得、さらに国民新聞副社長・無仏居士阿部充家の協力により東京で独山筆跡の展覧会を行い、四万円の資金を得た。不足分は長泉村の安生慶三郎が補填し、さらに無尽を行い応急費用を弁じた。こうして書院・庫裡・寺社寮・東司が造営された。

庫裡は一九一九（大正八）ないし一九二〇（大正九）年ごろに着手、満三年ほどで完成した。当時宗舜・宗鶴ほかの雲水がいたが、この普請においては表参道の登り口まで馬力で木材を運び、その後は当時禅堂にい

た八人が総掛かりで担いで運んだという。また参道は宗舜が独力で作ったという。この宗舜はのちに自殺したが、龍澤寺の基礎を築いた人物であり、周囲の信頼を非常に深く集めたと伝えられる¹³⁾。

3、中川宋淵の人生探求

中川宋淵は一九〇七（明治四〇）年三月一九日出生、本名中川基（なががわもとし）である。父陸軍軍医助太郎、母和子の長男として台湾基隆^{キョウリン}に出生。基は基隆での懐胎にちなむ。原籍 山口県玖珂郡岩国町錦見。のち本籍地に戻る。一九一三（大正二）年四月、六歳にて岩国小学校入学と考えられる。

一九一八（大正七）年一一歳のとき父助太郎三五歳にて逝去するも、内面にどの程度の影響があつたかは不明である。ただし母への孝行を欠かさなかつたことを考えると、いわゆる「女手一つで育ててくれた母の恩」を一層感じていたと考えられる。一九一九（大正八）年一二歳のとき岩国小学校卒業、広島市上波川町京橋筋六二―二へ転居、四月には広島県立第一中学校に入学する。この年水泳の師範助手を務めたとされる。一九二四（大正一三）年三月に広島県立第一中学校卒業、四月に第一高等学校高等科文科（甲類）入学。文学芸術との出会いはこのころである。広島一中『鯉城』三三号に臨海教育の詩的情緒を記した中川基「室積の一日」が見える¹⁴⁾。記載の卒業年が一年ずれており本人の作品であるかは検討の余地を残すが、真筆であるならこのころから文学的関心が豊かだったものとみられる。

一高入学後のこの時期、「一生の仕事として、真実此の生命を投げ出せる何者かを求めやうとしてあがいてゐた。それを見付け出し、生活の大方針が定まってからでなければ、何をするのも無意味だ」という¹⁵⁾。文学青年はしばしば心身の不調を来しながら文学にのめりこむルートを辿るが、基少年にも原因は不明な

がら希死念慮が窺える⁽¹⁶⁾。やがてショーペンハウエルの一節に感動し、「求める心」がやみ、澄み切った万象に目覚めるに至る。この経験が禅への機縁であると考えられる。

この間、俳句を沼波瓊音に師事、臈旦と号した。『詩鼈』中「附鼈」に収められた連句からは、先生として樋口功（国文学者。俳文学研究者）、天野雨山（俳人。俳諧研究者）、同窓として柴生田稔（のちアララギ派歌人。国文学者。明治大学教授⁽¹⁷⁾）、松井定之（のち国文学者。能楽研究。法政大学教授⁽¹⁸⁾）、石原英夫（号映水。俳人・国文学者。三〇歳で早世⁽¹⁹⁾）との交流が見える。同窓にはこのほか、岩淵悦太郎・宇佐美美喜三八・大津有一・松田武夫・原田清・森永種夫や、作家の藤沢恒夫らがいた⁽²⁰⁾。基青年の優秀さは周囲にもよく知られており、後年には「同級生仲間ではいちばんのできすぎ」として高見順とともに挙げられるに至る⁽²¹⁾。

一九二七（昭和二年）二〇歳の三月に第一高等学校高等科文科（甲類）卒業⁽²²⁾、四月に東京帝国大学文学部国文学科に入学する⁽²³⁾。大学キャンパスは関東大震災罹災直後でバラック通いであり、図書館も復興したばかりの時期のことであった⁽²⁴⁾。学生思潮においては民本主義からマルクス主義に進んだ東大新人会が弾圧を受けた時期にあたり、基青年入学の翌年にあたる一九二八（昭和三年）には大学当局から解散を命じられている。

宋淵は本郷浄土宗願行寺に下宿、入学後には大学オーケストラで第二バイオリンを演奏する。また東京白山勝林寺で空華室・勝部敬学の禅会に参加、諸方の禅僧を訪ねて講話を聴いた。宋淵は禅に傾倒していく。「中川君は（中略）一高時代から着用したと思われるマントを着用し、ソフトをとんがり帽子にしかぶり、余暇が生ずると、その姿で飄然と中山道などを行脚し、禅寺をたずねて一宿を請うという風であった⁽²⁵⁾」と伝えられている。

二、中川宋淵の入寺と化育

1、中川宋淵の出家得度

中川基は東京帝大では国文学を専攻するが、むしろ哲学や宗教の講義をよく聞いていたという。専攻の国文学は藤村作の時代であり、俳諧は志田義秀であった⁽²⁶⁾。藤村作は日本学界に俳文学の領域を作り上げた人物、志田義秀は日本で初めて俳諧で博士号を取り、東京帝大で連俳史を講じた人物である。一九二八（昭和三）年以降、柴生田稔や樋口功らと連句を試みている⁽²⁷⁾。

一九三〇（昭和五）年、二三歳の三月に東京帝国大学文学部国文学科卒業⁽²⁸⁾、卒業論文は芭蕉『猿蓑』の研究であった。四月に東京帝国大学大学院文学部において「俳諧全史」を攻究⁽²⁹⁾、おそらくこの年には女子専門学校（具体名は未詳）で講師として教えている。この頃一高では教授に迎える準備がなされていたとい⁽³⁰⁾、研究者としての中川基の優れた資質が窺われる。

一九三〇（昭和五）年頃より、後年師と仰ぐ般若窟・山本玄峰、東京白山道場月例禅会（正修会）にて摂化、宋淵が玄峰と法縁を結ぶ場となったと考えられる。翌一九三一（昭和六）年二四歳の三月一日、甲州塩山興嶽寺、勝部敬学のもとで出家得度、中川宋淵となった。この間の心の流れについては『詩龕』二一龕「変容」が出家の心境を示していると考えられ、その前後の各「龕」に記された動向や、その他の記載が前後の心境を示していると考えられる。

二〇龕「人の座」所収「柩」に「あたゝかな人間の能力が儼には一片も残されてをらぬ」とあり、二一龕「変容」所収句に「出家に意決す 涼しきや心をうつす水と空」、また同所収詩「変容」に「生命の幕を一寸

かゝげてお前の『在所』^{ありか}を少しいざらせばそこで身のすくむ様な展望がありとある形容詞を吸収してしまふのだ」とある。「未は博士か大臣か」式の栄達の可能性があつた宋淵が出家した理由は、栄達とは別個に存

する根源への渴望があり、それを実現する手段は禅しかない^{と見るに至つたのではないかと考えられる}。

また社会主義思潮に対する反発も興味深い。『詩龕』『附録之三 化縁文集』に収められた「一 朱達磨化縁文」に「所謂地主小作者の關係より生ずる不愉快なる感情を一掃し『働く処に喜びあり』底の宗教的農村の経営実現に道拓かれ独のゲーテ描きて成らず露のトルストイ夢見て果たさざりき理想郷は此処向獄寺を中心にして結節さるべし」と、また同「三 大菩薩道場化縁文」に「日本は東西両文明を合流して、世界人文史一大転向を司るべき契機点（中略）牆に聞いて左傾、右傾するには及ばず（中略）深く国体の淵源を察し、国史の実脈絡を辿る時（中略）、世界統一の秘鑰をその胸裏に見出す事を得べし。『誠』の一字此れなり（中略）しかして法運漸く動いて『まこと』の人士、大菩薩の勝縁をめぐつて集る」とある。

根源への疑問と葛藤は、藤村操の自殺を画期として日本思想・文学史上の転換点である。文学史上の「立志栄達から煩悶青年へ」という図式を用いるなら、いわゆる「煩悶青年」の型に入るであろう。また理想社会への志向は民本主義時代の新人会との親和性を感じさせる。労使闘争への反発感により、当時マルクス主義化していた新人会系の思潮に反発し、自己の展望を見出そうとした様子も窺える。

宋淵は、当時最高のエリート養成機関における思想蓄積を踏まえて時代思潮の動向を俯瞰し、それら全体に対して疑問を抱き、禅に展望を見出したと考えられる。一九三四（昭和九）年宋淵二七歳のとき、東京大学陵禅会が結成され、宋淵は指導者の役割をも果たす。これもまた同質の動機を後輩に及ぼそうとしたものと考えられる。陵禅会での宋淵については回顧文献『明暗双々 東京大学陵禅会六十年史』に詳しい（31）。

2、中川宋淵の入寺と俳句

宋淵が龍澤寺に入ったのは一九三五（昭和一〇）年、二八歳のときである。そのころには僧堂の様子はとおむね整っていたと考えられる。宋淵が龍澤僧堂の改善に直接かわったかは定かではないが、甲州塩山興嶽寺時代には金策のために行動していたことが『詩龕』に収められた「朱達磨化縁文」「樺太行脚金色化縁文」にみえる。

一九三一（昭和六）年、二四歳の三月に出家得度、中川宋淵となったが俳諧への関心は強く、同年には赤津好一との談上、山梨の文人の話題となり、後日飯田蛇笏主宰『雲母』を贈られた³²⁾。九月初閉山後の富士山頂に三泊、『華嚴經』八〇巻を読誦した帰途、ホトトギス俳人で『雲母』主宰である飯田蛇笏の門を叩いている³³⁾。

蛇笏は宋淵作品を高く評価、「虚子が蛇笏がと言うけれども、俳句は宋淵に如かずである。宋淵を見出し、俳壇に示したことも、我が俳業の大なるものの一つである³⁴⁾」と論じたと伝えられ、宋淵は俳人としての名声を得ることになった。ただし宋淵の俳句学習はあくまでも学生時代にあり、俳界の影響はさほど受けていない³⁵⁾。

宋淵の特色の一つに俳句行脚があり、一九三二（昭和七）年二五歳の夏、行者長治とともに樺太行脚、一九三九（昭和一四）年には格也居士と満ソ国境行脚に出ている。格也居士はおそらく俳人で『韃靼』同人、国際運輸の吉村格也である。

一九三三（昭和八）年二六歳の六月三〇日、木食生活に入るとともに『詩龕』を編みはじめ、一九三六（昭和一一）年二九歳の三月には『詩龕』が刊行された。刊行後には刊行記念会が開催され、在米の千崎如幻と

の結縁にも繋がるが、時期未詳ながら山本玄峰からは「お前さんは俳人になってはいかん」と商量があったと伝えられる⁽³⁶⁾。

『詩龕』以後は、『命篇』（一九四九（昭和二四）年）、『遍界録・古雲抄』（一九八一（昭和五六）年）、没後『法光寿』（一九八五（昭和六〇）年）がそれぞれ刊行された。『法光寿』は他が「因行格」であるに対し、「果行格」のものであるとされる⁽³⁷⁾。

作品意図については『命篇』跋文に「余の一生は詩龕（自大正十五年至昭和十一年）命篇（自昭和十一年至現在 靈筐（将来）の三部作を以てなり、命篇は更に大菩薩篇、大陸篇、龍澤篇の三篇に分る。龍澤篇に前篇後篇あり。本書は即ち龍澤後篇の一部なり。身、龍澤寺にあり。詩文に耽着して出家の本分を失する所以のものは、ひたすら「靈筐」への道をたどればなり」とある。

さらに『詩龕』は刊行分では三三龕までであるが、稿本として六四龕までが残存している。ここでは集録冊のみ挙げれば次の通り。『詩龕』Ⅱ一〜三三龕。『龕Ⅰ』Ⅱ三四〜四一龕。『龕Ⅱ』Ⅱ四二〜四九龕。『五〇龕（仮名）』Ⅱ五〇〜五六龕。『黄鐘』Ⅱ三四・五七〜六四龕。都合、一九二六（大正一五）年一月から一九四三（昭和一八）年四月一五日までの句日記となっている。おそらく一九四三年頃にプランの変更が生じ、『命篇』の稿本の一部をなすに至ったと考えられる。

俳句のほか、北原白秋を通じて近代詩、中里介山を通じて大衆小説との接点があった。これらは『詩龕』に出ている。一九三七（昭和一二）年、三〇歳の八月一日には「大菩薩峠祭」において道友会の面々とともに「大菩薩峠」を演じ、童女大勢による「詩龕踊り」を演出した。宋淵は演劇「大菩薩峠」で与八、米友の二役を演じたという⁽³⁸⁾。

一九四一（昭和一六）年宋淵三四歳の一〇月には龍澤寺が僧堂として開山した。絶対肉食主義の宋淵は常住の役に就かず坐禅し、宋淵を規矩の整った僧堂に再修行に出す議も出たが、宋淵を預れる老師はいないとの玄峰の鶴の一声により消滅した⁽³⁹⁾。従来玄峰は宗舜を後住にと考えていたが宗舜は自分の功績を誇ることを嫌って断じて受けなかった⁽⁴⁰⁾。

そこで一九四二（昭和一七）年宋淵三五歳のとき、四月一日付で玄峰は遺言書に「龍澤寺後住を中川宋淵と決定す」と記した。宗舜は終戦直後の一〇月三日に自殺を遂げたが、理由は不明である⁽⁴¹⁾。その後一九四七（昭和二二）年宋淵四〇歳の年、玄峰はついに「あとは宋淵さんに継がせる」と発言した。宋淵にとっては寝耳に水であつたが、継ぐ決意をしたのであつた⁽⁴²⁾。

このあたりから宋淵の独自性が表れ始める。一九四九（昭和二四）年四二歳の三月から九月にかけて、宋淵は第一回アメリカ巡錫に出向き、これが禅仏教アメリカ布教史上の大きな機縁の一つとなるが、玄峰はこのアメリカ行きに賛同しなかつたという⁽⁴³⁾。その理由については現時点で不明である。

山本玄峰との関係は、何よりもまず、僧堂規矩の点からいえば無理のある宋淵を、玄峰が確かに受け容れたところにある。その内容たるや、「宋淵老師をして今日あらしめられた、その深謀遠慮の経緯は、われわれ事業の後継者の養成に多少意を用いる者にとつて、またとない教訓を与えられる⁽⁴⁴⁾」という程であつたという。

玄峰の影響は無論圧倒的であるが、その最大の影響点は、文学者中川基を消去し、禅僧中川宋淵を確立させたところにある。禅と他諸芸との緊張関係は、五山文学は言うに及ばずしばしば見られるところであるが、ここでは禅と俳文学との関係として再演されたと考えるべきであらう。

もつとも消去したはずのものが再び現れたところに、俳禅一如の老師にして米欧布教僧・中川宋淵が表れるのである。玄峰は師家としての宋淵を「うちの新命老師（『宋淵』）などは、学問もしておるし、方便もいいし、いろいろ親切に話もしてくれるじやろう⁽⁴⁶⁾」と評していた。

三、山本玄峰の終戦工作

1、山本玄峰の平和思想

山本玄峰は「禅宗は臨済將軍というくらいのもので、世の中のりくつをこねまわす学者や、上の方のどうにもこうにも手の合わん人間を濟度していくのが禅宗じゃ。だから昔から柳生但馬守のような劍客とか、宮本武蔵のような劍客とか、明治維新当時でも勝海舟とか鉄舟とか西郷とかいう大豪傑で、ただで承知のできん者が禅をやつた⁽⁴⁶⁾」と述べているが、それだけに禅宗と政治との結びつきもまた深いものとなりやすいと見受けられる。

山本玄峰のもとにも伝承があつた。玄峰の語るところによれば、西南戦争の直後には山本玄峰の師の師にあたる日多庵河野伽山が伊藤博文の肝いりで道林寺における接心を行い、勝海舟・高橋泥舟・山岡鉄舟らが参禅した。また山岡鉄舟はこのときに伽山に帰依し、のち全生庵につながる。また伽山は伊藤博文がつくかたちで明治天皇と面会したという⁽⁴⁷⁾。

「白隠の再来」と謳われた山本玄峰本人もまたこうした流れを体現した人物であつた。当然宋淵もそれを親しく見たものと考えられる。玄峰は「めいめいの本心、自性、自身の本心も知らずに、危ないのじやから、

ここは、うーんと坐るほかない。今は日本も危い、危い。主となつて国家のこの危急の場合を率いていかんならん人たちが、自分自身が危なくて見ておれん。戦争のおこる前にいろんな事件がおこつた⁽⁴⁸⁾」云々と述べているが、この一語からは禅と政治思想との結合関係、およびその實際が窺える。

また「人のために社会のためにならんならん。けれどもどこまでも人間本位じゃ、人間を離れて説いた法はない。何といつても人間が一番大切である。(中略)いつもカラツと照つた秋の月の下に住んでおるような氣持で、明るい安楽な生活をどうかしてさせてやりたい。仕事はいろいろ分担していくのじやが、自分の宿因、宿つた因縁ということを知り、わしにはこれより以上の徳もなければ、いくら勉強しても今生ではこれ以上のことはできないということを見定めて、未来をはつきり承知する⁽⁴⁹⁾」とある。

あるいはまた一喝して腰を抜かせた体験を引き、「それは理くつじやない。みな禅定力から出る力じや。それじやからどんなところで人と応接して、ハアイといつて頭を下げておつても、人一倍の力を持つておらねばならん。外交官など向うの威力に吞まれておつたら何もできない。こつちはいつでも明鏡台じや。向うの思つておることがすつかり写つてくる。みなめいめい含藏識を持つておる、そこへ畳み込んで開發する。坐禅の徳というのは尊い⁽⁵⁰⁾」とある。

政治行動には決断の胆力と行動の不動心を要するから、政治と禅僧との接点が生じるのは必然だつたであろう。そのような立場から政治問題にも強くかわつていったと考えられる。もつとも、以下しばらくの主人公は山本玄峰であり、宋淵はそれに随行する立場となる。

玄峰は「わしの部屋は乗合舟じや。村の婆さんも来れば、乞食も来る。大臣も来れば、共產党までやつて来る……みな同じ乗合船のお客さまじや⁽⁵¹⁾」と言つたと伝えられる。とりわけ終戦工作においては、玄峰

のもとですべての立場の人々がともに動くことになる。

2、山本玄峰の戦争認識

山本玄峰の行動は世界的な視野を持つものであった。その具体的な表れとしては一九二三（大正一二）年、宋淵はいまだ一六歳のときであるが、玄峰外遊の折、米国大統領ハーディングと意気投合、さらにバーミンガムで開催中の世界平和研究会で「世界平和と仏教」について講演したとの記録が残る。

一九三四（昭和九）年九月一日、玄峰は井上日召のため特別弁護を行った。日召は国家刷新を希求し、法華経に依拠したことで知られるが、壮年時代に満州で坐禅をして幾つかの公案も通過していた⁽⁵²⁾。その上で政治上の挫折から一九二六（大正一五）年に建国会を脱会、真実を求めて玄峰のもとに参禅するに至った⁽⁵³⁾。その後一九二九（昭和四）年に同志の求めで玄峰のもとを去り、血盟団事件を起こすに至る。

玄峰は日召の死刑求刑を聴いて特別弁護人として立つことを決意した。「本人としてもとてもいふにはれぬ立派な心境になつてゐる。（中略）これを察しうるのはわし位のもんです⁽⁵⁴⁾」との立場から、「和合を破り国家国体に害を及ぼすものは、たとひ善人といはれるとも、殺しても罪はないと仏はいう、（中略）日召が真の仕事をするのはこれからと思ふ⁽⁵⁵⁾」と陳述した。日召は無期懲役となり、一九四一（昭和一六）年、紀元二千六百年の恩赦により出獄、他の人々とともに再び玄峰のもとに参ずることになる。

一九三五（昭和一〇）年六月、山本玄峰を含む日華仏教研究会会員一人が日華親善のため中国本土に渡つたのであるが、その後新京で玄峰と須原秀文とを招いた歓迎会が開催された。主催は大橋忠一満洲国外交部次長であった。その席上、新京に妙心寺別院開創の機運が生じた。

翌一九三六（昭和一一）年七月には満州国新京特別市神泉路に玄峰を開山とする妙心寺別院が開創され、満州国皇帝はじめ諸大官の歓迎を受けたのであった。一月二九日には禪堂開單式が開かれ、以後布教が続けられることになる。

以後新京妙心寺には次の人々が出入りしていたと伝えられる。大橋忠一・河本大作・東宮鉄男・吉村格也・川人勝一・中村琥逸・半田敏治・松田芳助・星子敏雄・伊藤六十次郎・里見良作・平田九郎・原口統太郎・江藤夏雄・板垣守正・鄭孝胥・臧式毅らである⁽⁵⁶⁾。

これらの人々はいずれも満州政治の中心であり、その会話の中で時代を見抜く目がさらに磨かれたことは疑いない。一九四〇（昭和一五）年一月、山本玄峰は病気を理由に別院住職を退任、内地へ戻るが、実際には満州要職者の言を総合して日本の敗戦を察知、「えらいこっちゃ」の一語を残し帰国と伝わっている⁽⁵⁷⁾。

一九四一（昭和一六）年初頭、玄峰は日中戦争終結のため、紀元二千六百年恩赦により前年出獄していた井上日召を伴って蒋介石に面会しようとするが軍部の反対にあい挫折した⁽⁵⁸⁾。五月一日、井上日召・田中清玄・四元義隆が龍澤寺に入山する。直日は宋淵、典座は宗舜であった。

玄峰の反戦思想はすでに多くの人々に向けて現れており、時期未詳ながら山本五十六に「百戦百勝は一忍にしかず」との書を与えたことがあると伝えられる⁽⁵⁹⁾。また世間では好戦況の報じられていた一九四三（昭和一八）年秋、ドーリットル空襲が行われるが、玄峰は当日の新聞を読むや否や「これはもうだめだ、日本は負ける⁽⁶⁰⁾」と語っていたという。

3、山本玄峰の終戦工作

戦争末期、玄峰のもとには次の人々が出入りしていたという。米内光政海相、井沢多喜男枢密顧問官、富田健治書記官長、鈴木貫太郎首相、迫水久常書記官長、吉田茂、樺山愛輔元日米協会長、安倍能成、岩波茂雄、菊池盛登静岡県知事。いずれも日独伊三国同盟に反対し、戦争の早期終結を求める和平派の面々であった⁽⁶¹⁾。

東条内閣との関係では、一九四四（昭和一九）年四月一九日、すなわち先記ドゥーリットル空襲の翌日に、内務大臣安藤紀三郎の要請により同大臣のもとに出向いた。迎車が皇居前を通過した際「ときに、坊主の値段も下落したものよなあ。俺がたかが内務大臣に呼ばれて出かけていくんだものなあ。昔なら法のためとあらば、法皇さまでも寺までお出でになられたものだぞ」と言つたと伝えられる⁽⁶²⁾。さらに六月ごろには東条英機本人からも面会希望があつたが、我見ありとみて断つたという⁽⁶³⁾。

さらにこの頃には、田中清玄に対し、貞明皇后および昭和天皇がそれぞれ国と国民を心配している旨を独り言ちたという⁽⁶⁴⁾。おそらく玄峰は、皇室内部および数多くの政権中枢部の人々の内意を知る立場にあつたのであろう。玄峰にとつての課題は、「戦争遂行」が強く叫ばれ反対者が次々と投獄されるなかで、天皇を含めた終戦の意思をいかにして統一し、戦争終結を実現するかにあつたと考えられる。

一九四五（昭和二〇）年一月、玄峰は蠟八接心において田中清玄に「これから日本をどうするか」と問うた。三日目に察した清玄が「日本は敗けて戦争をやめるしかありません」と答えると、「そうじゃ。日本は大関じゃから綺麗に負けにやいかん」と答えた。

玄峰は続けて「日本は、やれ聖戦完遂や、やれ本土決戦やと我慢や我見にとらわれておつたら、国体を失

い、国は壊滅し、国民は流浪の民になるぞ。今こそ日本は戦争に負けて、国を救うんじや。どうだ、命を賭けた人間が五人おりやあ、できる。どうだ、お前できるか！」と言った。それを獅子王のごとく感じた清玄は立ち上がって心の底から「やります」と絶叫したという⁽⁶⁵⁾。

鈴木貫太郎との関係が終戦工作に直結した。四元義隆の回顧では三四歳のとき、それが数え年であれば一九四一（昭和一六）年に、四元は鈴木貫太郎と出合い腹藏なく話すことができたという。そこで四元は直感的に鈴木と玄峰を引き合わせることを思いつき、実際に東京で引き合わせた⁽⁶⁶⁾。

一九四五年三月末のこの面会において、二人は「ばかな戦争」は「やめねばならぬ」と「鏡の合うごとく」にびつたり合つたとされる⁽⁶⁷⁾。帰途玄峰は、車内で「こういう人間がいるから四元、日本は大丈夫だ」と大いに喜んだという⁽⁶⁸⁾。

田中は野木將軍邸前内田眼科医院での面会であつたとするが⁽⁶⁹⁾、四元は鈴木邸での面会であつたとする。いずれにせよ、四元によれば、その時点では鈴木への大命降下は思いもかけず、前後の時期、四元は別の機会に近衛次期内閣の前提で鈴木と会談したとされる⁽⁷⁰⁾。

四月六日、鈴木は首相となるが、田中によれば、鈴木は自身に総理大臣の内命が下つた際、玄峰に相談したと回想する。玄峰は鈴木が人の善悪を見抜くものではないから平時の宰相には向かないが、尽忠無私であり本来なら二二六事件で死んだはずの身だからこの非常時には向くと勧めた⁽⁷¹⁾。

八月八日深夜、四元は終戦になる決定を知り玄峰に報知した。鈴木総理の親衛隊の一人松岡健一が龍澤寺の玄峰に手紙を届けた⁽⁷²⁾。さらに八月一二日早朝には総理鈴木貫太郎の使者が山本玄峰に終戦の決断を告げに訪れたのであつた。玄峰は鈴木に「忍びがたきを忍び、行じがたきを行じ」の一節ある手紙を送つ

た⁽⁷³⁾。終戦の詔勅と重なるものである。

新憲法制定時における「象徴」をめぐるエピソードも興味深い。もし事実であるとすれば、天皇「象徴」の語の日本側提案者であるということになるからである。現時点では櫛橋渉・田中清玄の証言があるものの、アメリカ側の史料を欠き、新憲法との影響関係については厳密に確定できないが、証言内容と評価の見通しを簡単に紹介しておく⁽⁷⁴⁾。

一九四五年一二月二日、田中清玄が天皇と面会、天皇制護持の見解を告げ、のちに山本玄峰・鈴木貫太郎に面会内容の一部始終を報告した（のちに吉田茂にも報告したと伝えられる）。さらに翌日もしくは翌年一月、櫛橋渉は田中が天皇に面会したことを聞きつけ、天皇の位置づけについて田中に相談した。田中は師の見解を聞くべきだとして玄峰を紹介した。

田中はクリスマス前のエピソードであるとし、櫛橋は一月であるとする。後者であるとすれば、櫛橋は幣原喜重郎に抜擢され、内閣書記官長となっていたことになる。櫛橋の回想によれば、天皇を除外したい極東委員会の内意を受けたGHQより相談を受け、櫛橋はアイデアを求めていた。

櫛橋は幣原に報告、櫛橋自身が面会することになり、田中とともに三島を訪れた。竹倉温泉にいた玄峰は「天皇の件で来たな」といい、とつとつと昔話を語りながら、天皇不親政および「象徴」の語を授けた。櫛橋はこの話を持ち帰り、幣原に伝えた。櫛橋はこれが日本国憲法の「象徴」の語となったのであると述べている。

以上がもし大筋で史実であるとすれば、象徴天皇制成立経緯の一端が窺えることとなる。以上が戦中戦後政治史における玄峰の活躍のおもなものである。その後田中・四元が自民党政権の背後でフィクサーとし

て活躍したことはよく知られている。

なお戦時下の中川宋淵の動向は必ずしも明らかではない。一九四二（昭和一七）年には母中川和子を龍澤寺に迎えているが⁽⁷⁵⁾、玄峰と異なり政治的にはあまり動いていなかった可能性もある。一方グロテスク趣味の天宿窯で知られた上口愚朗（テラー・陶芸家）と交流しており、茶人としての宋淵の様子も伺える⁽⁷⁶⁾。この時期詩禪一如・茶禪一如の境界が深まってきたものと考えられる。

戦後すぐの時期には、それぞれ「○○童子」と名乗る「童子会」を結成、以後とりわけ一年に一度中秋の名月の際に会って清談を楽しんだと伝えられる。結成者は木村行蔵（警察。黙童子）、海童普門（尺八。海童子・怪童子）、宋淵（空童子・食う童子）の三名、のち一九五八年頃には衣笠貞之助（映画監督・演出家）、市川猿之助（俳優）、坂口愚朗（前述。愚童子）、村井順（内閣調査室長。笑童子）等十数名にのぼったという⁽⁷⁷⁾。

四、アメリカ・イスラエル布教と龍澤寺継承

1、中川宋淵と千崎如幻

山本玄峰は禅宗の未来について次のように述べていた。「日本もこれから先、ソ連とどうなつていくやらわからんけれども、どんな政党ができてこようが、われわれの正法は人間の力で動かすことはできない。どんな力でも動かすことはできない。そういう正法を護持していくのじや。それには氣を丹田に満たして、一点の妄想もまじえず、六根清浄でなければならん。（中略）走る馬をむち打つように時間を惜んで接心をしていただきたい。これが本当の伝灯の大菩薩と申さねばならん。このうちにそういう人が一人でもあつても

raitai. これがわしの最上無上のお願である。もうこれからの禪宗坊主は世界的の見識をそなえた人物でなければならん」⁽⁷⁸⁾。宋淵の後半生はこの点を推し広げ、かつ課題にぶつかったものと考えられる。できる。

宋淵がアメリカとの法縁を得たきっかけは一九三四（昭和九）年二七歳の『詩龕』の刊行に遡る。九月『婦人公論』誌に掲載された『詩龕』紹介記事を棚橋秋旻女史が見出し、これを在米千崎如幻に報知した。一二月には千崎如幻、宋淵に第一信を送る。宋淵にとり米国との接触の端緒となった。

翌一九三五（昭和一〇）年一月、宋淵は千崎如幻に対し返信。以後交友関係を持つ。如幻は「祖国に同志を見つけた！」「と感じたと伝えられるが、具体的な内容は現時点で明確ではない⁽⁷⁹⁾。如幻もまた詩歌を好んだため⁽⁸⁰⁾、そこに接点が残した可能性が高いであろう。

千崎如幻は禅のアメリカ布教の開拓者の一人であり、一九三〇年ごろロサンゼルスに移り、「東漸禅窟」を開設したことで知られている。一九三九（昭和二四）年一月には宋淵が渡米を企図したものの成功しなかった。しかも日米戦争の開始に伴い一九四二（昭和二七）年には日系人収容により終戦まで収容を余儀なくされた⁽⁸¹⁾。

一九四七（昭和二二）年宋淵四〇歳のとき、山本玄峰より龍澤寺後住を託された。その年玄峰は妙心寺派管長となり、翌一九四八（昭和二三）年に退任するが、その直後である一九四九（昭和二四）年三月から九月にかけて、四二歳の宋淵は第一回アメリカ巡錫に出向いた。このとき玄峰は行つてはならぬと言ったと伝えられるが⁽⁸²⁾、宋淵は出立した。

三月二〇日頃、俳句上の師である飯田蛇笏のもとを訪れ、松尾、石原八束とともに歓談し、大菩薩峠に登

り、東京支社（雲母か）歓送句会に臨んだ。三月二六日横浜発。親しい句友に見送られてゴールドン号乗船。日本人乗客二四九名、そのほかアメリカ・ロシア・ドイツ・フランス・ユダヤ人等が乗っていたという⁽⁸³⁾。

四月四日ホノルル着、同七日サンフランシスコ着。このとき千崎如幻と初めて会見し、一泊した。翌八日陸路ロサンゼルスへ移動、ロサンゼルス都ホテル内に存した旧東漸禪窟を拠点にカリフォルニア州各地を巡錫、神智学協会などで講演を行った。九月ロサンゼルス発、海路帰国した。

この年は鈴木大拙が渡米、コロンビア大学に教えた時期でもある。多数の著作により後年の米国禪ブームに大影響を与えた。一九五〇年代にはアメリカでZenブームが本格化した。この時期のアメリカ禪は「ビート禅」と呼ばれる⁽⁸⁴⁾。

一九五四（昭和二九）年四七歳の折、年譜には「米国の求道者エッケン・Pカプローを発心寺へ紹介す」とある。これはロバート・エッケン（エイトケンとも表記）とフィリップ・カプローを指していると考えられる。翌一九五五（昭和三〇）年二月には第二回渡米を行い、空路にてロス東漸禪窟千崎如幻に面会した。さらに翌一九五六（昭和三一）年宋淵四九歳の年には千崎如幻が五〇年ぶりに来日し龍澤寺に来山、玄峰と相見し親交を結んだ。

宋淵のアメリカへの意欲は強く、一九五七（昭和三二）年夏には研泰禅士こと後の嶋野栄道に渡米を促した。また翌一九五八（昭和二三）年の一〇月以降の時期、宋淵は隠寮にて棚橋秋旻、島野栄道と三人で千崎如幻のテープを聴き、愚朗茶碗を囲んで円相に手を繋ぎ、「いつかアメリカでこのようにして会いましょう」と固く約束を交わしたと伝えられる⁽⁸⁵⁾。

その年五月六日に千崎如幻は遷化したが、宋淵に対し東漸禪窟を整理する依頼の遺言を行った。そこで七

月一六日第三回渡米において、空路ロスに向かい、如幻の遺言に従い東漸禅窟を整理、報恩接心を円成した。その際の侍者はロバート・エッケンであつた。

2、アメリカ布教の拡大とイスラエルとの接点

一九六〇年代に入ると、アメリカの禅が実践中心のものへと転換、ヒッピー、カウンターカルチャーとも結合してさらなる隆盛を迎えた。一九六〇（昭和三五）年一月には第四回渡米を行い、二月一日にはハワイ禅堂にて接心を行った。この禅堂はココ庵といい、庵主はロバート・エッケンであつた。ココ庵とはエッケン邸である。四月帰国。同年八月二〇日には研泰禅士がハワイへ出発した。宋淵は見送りのため横浜に向向いている。

一九六一（昭和三六）年、宋淵五四歳のとき、一月から二月にかけて第五回渡米を行った。一月二八日空路ホノルル着、旧ココ庵において接心ののち、サンフランシスコ経由ニューヨークに飛び、二月七日ダラウェア州ウエルミントンにて接心、同二六日ホノルルに戻り、ハワイ大近くの新ココ庵にて接心を行い、三月八日に空路帰国した。なお六月三日には山本玄峰が遷化、八月には研泰禅士（嶋野栄道）がハワイに出立した。

一九六三（昭和三八）年、宋淵五六歳のとき世界行脚を行った。一月二九日に出立、インド・ヨーロッパ・イスラエル・アメリカを巡った。このときが第六回渡米であり、ロス在住の如幻遺弟である光心居士を伴った。俗名をグッディングという。四月一日帰国した。その後一九六五（昭和四〇）年一二月三十一日には研泰禅士（嶋野栄道）がハワイよりニューヨークへ転錫した。

一九六八（昭和四三）年宋淵六一歳の六月から九月にかけて第七回渡米ならびに第一回渡イスラエルを行った。出立に先立つ六月四日、紐育禪堂へ向け本尊仏、扁額が出立し、同月二十九日には安谷量衡とともにホルル經由ロス着、七月一日より七日にかけてオハイにおいて接心、九日にはタサハラ禅道場に投宿した。同月二十六日には宋淵の命で中川球童がイスラエルのオリーブ山に移った。なお球童は宋淵の後を襲った鈴木宗忠ののち、一九九〇（平成二）年、龍澤寺を継承した。

同月三〇日ロス発ニューヨーク着、八月二日より八日までタキシードパークにおいて接心、同月二三日より二九までリッチフィールドにおいて接心を行った。さらに九月一五日にはニューヨーク市マンハッタン紐育禪堂を正法寺と命名、開單式を執り行つた。これは宋淵の道友の法縁と嶋野栄道のニューヨーク移転により実現したものであった。

九月一六日、宋淵はニューヨークよりエルサレムに飛び、中川球童の護るオリーブ山に留錫、其仏寺と命名した。宋淵がエルサレムの禪グループを「オリーブ（O L I V E）山の死海（D E A D S E A）サンガ」と名づけたのもこの時期であると考えられる⁸⁶。同月九月二十九日に帰山した。ちなみにキリスト教との接点も近くなったようであり、一九六九（昭和四四）年六二歳の年末一二月二四日には不二聖心女学院のクリスマスライブに出向している。

3、渡米の拡大と大菩薩禪堂の建設

一九七〇年代に入ると、アメリカ禅は安定拡大期に入る。一九七〇（昭和四五）年宋淵六三歳の年、宋淵は体調不良に悩まされたが、二月六日には鈴木宗忠が第二回渡英、宋淵回復後の三月一九日にはニューヨーク

ク禪堂より二名のアメリカ人雲水が来山し、相見している。四月六日にはエルサレム菩薩会の一四名が来山し相見した。同月一五日の入制大接心は不調であつたが、接心後に中川球童並びにイスラエル一行と相見した。さらに同月、のち広徳寺住職となる正倫禪士が渡米した。八月一四日には鈴木宗忠が第二回渡英より帰山した。

同年八月より一〇月、第八回渡米を行つた。嶋野栄道同道、八月一八日空路ニューヨーク着、正法寺において接心、二四日より三二日までリッチフィールドにおいて第一回接心、九月六日より一三日までリッチフィールドにおいて第二回接心を行つた。二一日ニューヨーク発ロス着、二二日より二九日までサンタバーバラにおいて接心を行つた。一〇月一日には佐々木承周のもとを訪問、同日夜には棚橋秋旻大姉宅にて如幻遺弟の会である旧菩薩会の集いに出席した。三日にロス発帰国、九日に帰山した。

一九七一（昭和四六）年宋淵六四歳の四月、のち仏土寺住職となる宗甫禪士が渡米した。さらに六月には第九回渡米を行い、六月一三日牧島如九画伯同行、直行便にてニューヨーク着、同市キャッキル大菩薩禪堂に留錫、七月四日にはビーチチャー湖畔大仏開眼式に参加した。この頃ニューヨークにはまだ本格的な禪堂がなく、既存建物を禪堂として使用したという。

一九七二（昭和四七）年、宋淵六五歳の四月、のち靈梅院住職となる弘道禪士が渡米した。さらに七月から九月にかけて第一〇回渡米、第二回渡イスラエルを行つた。七月二六日ロス着、紐育禪堂の嶋野栄道、弘道禪士、王星居士が出迎えた。同月三〇日より八月六日までロス郊外サンバナディーノにて接心、ロス郊外のマウントボルディ禅センターに佐々木承周老師を訪問した。

八月七日には大陸横断自動車旅行に出向いた。伴僧は嶋野栄道、弘道禪士、王星居士であつた。同月一九

日から二〇日にかけてジャパンハウスにて薬師寺高田好胤管長、法竹、海堂普門師などと交流した。また紐育禪堂にて嶋野栄道の伝法入寺式を挙行、ニューヨーク郊外にて接心を行った。

九月六日より一三日まで旧大菩薩禪堂において接心、おそらくこのとき、宋淵はニューヨーク国際山大菩薩禪堂の命名にあたり、「よし、これでいこう。これしかない」と言い大菩薩禪堂と命名した⁽⁸⁷⁾。さらに同月一三日にはニューヨークキャッキル新禪堂地鎮祭を執行し、同日ニューヨークよりイスラエルに向けて出発、その後基仏寺において接心を行った。また同年一〇月には宗甫禅士が米国滞在を終えた。

4、アメリカ布教のさらなる拡大

一九七三（昭和四八）年六六歳の五月、宋淵は住職を退任、六月には心鏡室鈴木宗忠が晋山した。また同月には弘道禅士、米国滞在を終えた。一九七四（昭和四九）年、宋淵六七歳の一月より五月まで第一回渡米・第三回渡イスラエルを行った。

一月六日、嶋野栄道とともに海路カリフォルニア丸にて渡米、二六日シアトル着、大陸横断鉄道にてニューヨークへ向かい、二月一日にニューヨークに着いた。同月一五日より一六まで紐育禪堂にて接心、三月一日より二四日まで旧大菩薩禪堂において接心を行い、四月一日にはニューヨークのジャパンハウスにて「大菩薩の夕」を開催した。

同月五日、ワシントン花心禅堂を訪問、同八日より一四日まで旧大菩薩禪堂において接心、接了後に新大菩薩禪堂上棟式を行った。おそらくこの直後には、桜花爛漫の下、棚橋秋旻、島野栄道と三人で茶を点てた。これは一九五七年末頃の約束と関連したものであるとされる。同月一六日にはイスラエルへ出発、オリーブ

山基仏寺において接心、五月一日には中川球童へ伝法式を行った。またこの年には梅城和尚が米国滞在を終えた。

一九七五（昭和五〇）年、六八歳の宋淵は第二回渡米を行った。これは八月から翌年二月まで半年に及ぶ大規模なものであった。このときは六月一日に牧島如九作「釈迦涅槃絵」を予め米国へ送り、八月二日、仏師中野清光同行のもとロス経由ニューヨークへ移動、同月三〇日より九月六日まで旧大菩薩禪堂にて接心、同一二日より一四日まで紐育禪堂正法寺において接心、一二月一日より八日まで紐育禪堂正法寺において臘八接心、同月二五日より翌一月二日までベトナム人寺院にて接心を行った。

翌一九七六（昭和五二）年には一月一七日より二五日まで新築のニューヨーク大菩薩禪堂にて接心、同月二五日スイスに向け出発、シュテルベルグのスターマウンテンで接心、高山科学研究所に留錫、二月に帰山した。

なお宋淵はお籠りにて欠席したが、同年六月二六日には大菩薩旅行団がニューヨークへ出発、七月四日には国際山大菩薩禪堂金剛寺開単大接心、落慶入仏式が開催された。またこの年には禅のアメリカ伝播史である『NAMU DAI BOSA』も刊行された。一九八二（昭和五七）年宋淵七五歳のとき、六月から八月にかけて最後の渡米となった第一三回渡米を行った。

宋淵以後も龍澤寺後住はみな海外布教に力を入れており、先述の鈴木宗忠はイギリス・イタリア・ドイツを巡錫、ロンドン禪堂（金剛山般若寺）を建立し、海外特にヨーロッパ布教に尽力した。中川球童はイスラエルに一三年いたのちニューヨークに転錫、ブロードウェイにソーホー禪堂を開設した。また球童の後住である後藤栄山はドイツ・イギリスを巡錫、パリ郊外サンジェルベメディエーションセンターに於いて大接心

会を行った⁽⁸⁸⁾。

五、龍澤寺の維持継承とその後

山本玄峰が龍澤寺の復興に尽力し宋淵に後を委ねたことは先述の通りである。一九五〇（昭和二五）年、四三歳の宋淵は九月一八日付で住職請願届を提出、翌一九五一（昭和二六）年四四歳の二月一日に垂示式を挙行、四月二五日には宋淵が龍澤寺第十世住職として晋山し、山本玄峰は八六歳にて退任した。

その一年後の一九六一（昭和三六）年宋淵五四歳の六月三日、山本玄峰は遷化した。七月一日、宋淵は全生庵にて「玄峰老師年譜普説」を行っていた⁽⁸⁹⁾。翌一九六二（昭和三七）年五五歳の六月三日には山本玄峰の小祥忌を執行し、九月二八日には湯之峰温泉に「玄峰塔」を建設した。

宋淵は龍澤寺継承後、その維持のためいくつかの活動を行っている。周辺の宅地化のなかでの僧堂の環境を整備するため国師林を造営することとし、一九六五（昭和四〇）年五八歳の八月一日、発願のため「龍澤正法護持会趣意書」を草した。また一九六七（昭和四二）年六〇歳の二月一五日には龍澤初版本『白隠禪師年譜』を復刻刊行した。

同年四月一日から八日までの報恩大接心では、接心参加の雲水その他の人々が国師林造営の植林作務に従事した。後年の各老師の名前が見えるという。また国師林造営記念として『龍澤禪寺開山上堂普説』を復刻刊行した。

このほか、一九六三（昭和三八）年五六歳のときには寺内の水道である般若水道建設を発願した。この水

道は三月二七日に開通し、一九六九（昭和四四）年六二歳の二月に開通完工式が行われた⁹⁰。講義も何度か行っており、同年一〇月一八日の入制大接心では『臨濟録行録』を、一九七〇（昭和四五）年六三歳五月の大接心では『臨濟録上堂』を講じた。

ただしこの時期から体調不良が生じている。一九六五（昭和四〇）年九月、裏山で後頭部を負傷、竹が突き刺さり脳に達するものであり⁹¹、一月まで東大病院に入院した。その影響のためかは史料上定かではないが、一九六七（昭和四二）年六〇歳の年末には精密検査を受けた。以後療養のため「お籠り」することが増えた。一九七〇（昭和四五）年一月の蠟八大接心は体調不良により休講、心鏡室鈴木宗忠が代参した。

一九七三（昭和四八）年六六歳の五月一二日に宋淵は住職を退任、六月三日には心鏡室鈴木宗忠が晋山式を行つた。またこのとき山本玄峰の十三回忌も行われた。翌一九七四（昭和四九）年には妙心寺より歴住開堂に推挙されたが断り、関係者を驚かせた⁹²。一九八三（昭和五八）年七六歳の一〇月五日に三島駅新幹線ホームにて肋骨骨折、一九八四（昭和五九）年三月一日午前四時三〇分、急性心不全にて死去した。七七歳であった。

その後龍澤寺は、先述の心鏡室鈴木宗忠（一九二二〈大正一〇〉—一九九〇〈平成二二〉年。晋山一九七三〈昭和四八〉年）より、死活庵中川球童（一九二七〈昭和二一〉—二〇〇七〈平成一九〉年。晋山一九九〇〈平成二二〉年）、松華室後藤栄山（一九三〇〈昭和五〉—現在。晋山二〇〇八〈平成二〇〉年）を経て、二〇二五（令和七）年より臨濟宗妙心寺派宗務総長の野口善敬が住職を兼務し、現在に至る⁹³。

おわりに

山本玄峰・中川宋淵の系譜は、近代禪宗史上のみならず日本国家ひいては世界の動向にまで重大な影響を与えた驚嘆すべき存在であつたといわなければならない。その舞台となつたのがまさに龍澤寺であつた。以上の叙述より考えるに、歴史的評価としては、平和実現、後進育成、海外布教、芸術評価、寺院経営が挙げられる。この五点につき今後の研究のための示唆を行い、併せて史料解釈の特性にも触れて結びとしたい。

まず平和実現から論じたい。山本玄峰の軌跡からは、禪僧が修行を通じて体得した真理を説くだけでなく真理そのものを体現しようとする姿を見出すことができる。現時点ではほとんどが伝承にとどまり、史料による裏付けは今後しなければならないとはいえ、戦争遂行下の内外政治の複雑な力関係のなかで、玄峰は日本政治中枢の平和への意思統一において凝集核の役割を果たしたと見受けられるのである。

従来、玄峰の政治思想は、天皇への崇敬ならびに井上日召を擁護し⁽⁹⁴⁾田中清玄を転向させた⁽⁹⁵⁾点などから、臨済宗の戦争協力と一体のものであると捉えられてきたが⁽⁹⁶⁾、事はそれほど簡単ではない。天皇と国民のことを考える姿勢が、結果として平和創造へと展開したのである。このような場合、ある人物の思想は後人が想定する意味で直線的に結果を導くのではないという点にこそ着目しなければならない。

歴史の問題は構造の問題として捉えることもできるが、意思の問題として捉えることもできるのである。構造は事態を促進するが、意思は事態を構築させる。我々は人間である以上、意思の問題を欠くことはできない。とりわけその凝集核の役割を果たす人々は、構造への介入者として重大な意義を持つ。後者の立場から歴史を描くならば、龍澤寺の存在は必ずや見るべきものであると考えられる。その上で、各関係者の視野

が日本の利害の枠内に留まっていた可能性を顧慮したとき、当時の平和思想の意義と限界が浮かび上がってくるであろう。

ついで後進育成と海外布教の問題である。山本玄峰による子弟教育は、中川宋淵の存在によって示されるであろう。その先に、俳禅一如の龍澤寺住持にして欧米布教僧・中川宋淵が現れるのである。玄峰は師家としての宋淵を「うちの新命老師（＝宋淵）などは、学問もしておるし、方便もいいし、いろいろ親切に話もしてくれるじやろう」と評していた（97）。

海外布教についてはおおむね順調に進んだかにみえるが、宋淵の後進がアメリカの禅堂で行ったとされる不行跡問題は大きな論点を投げかけている（98）。歴史的評価は必ず一種の介入の意義を帯びるから、関係各位に配慮しつつ、海外布教の歴史的全体像を視野に入れて評価することが必要であろう。

つぎに宋淵俳句の問題である。宋淵の作家としての特性は、俳句作品が飯田蛇笏に見いだされたこと、連句の多さ、俳句のほかの諸芸術との接点等にあるが、中心は俳句であろう。俳文学史の流れは子規の俳句革新が一応主軸であるが、宋淵の作品は東大俳文学の学術研究の成立発展を背景として形成されたものであり、独特である。

歴史にイフはないが、宋淵の直前、一高では守随憲治が近世文学の教授、のち東大教授となつてゐる。戦後守随は近世文学研究の再建に尽力するが、中川基がこの役割を負った可能性も考えられる。評価の際は、このような人物が作り上げた俳句である点を、俳禅一如の点とともに評価する必要があると考えられる。

最後に寺院経営の問題である。寺院の運営と発展は常に課題であるが、龍澤寺の復興と展開からは近代における課題状況とその解決の一事例が浮かび上がる。他の寺院との比較を行いつつ、地域の歴史的変容や檀

家の人々の消長とともに進む寺院の位置づけの変化とそのなかでの生き残りの過程を描くならば、多くの傑物を生んだ歴史的土台としての龍澤寺の存在意義もまた見えてくるであろう。

このほか、史料解釈の特性についても留意したい。当然のことながら、当研究は禅をめぐる無数の人間が交錯するところに成り立つ。史料の全体像もまた極めて個性の強い人間と人間との強烈なぶつかり合いのなかで形作られている。

この強烈な意図の海をかき分け、そのなかから妥当な史実を見極めるのは決して容易ではない。誰が何のために何を遺し、したがつて何を遺していないのか、またどこでだれが話を膨らませ、あるいは縮めているのか、多くを見極めて研究を進めなければならない。またこうした世界を分析するには、通俗的な人物批評の言葉をそのまま術語に昇華することが必要である。

たつた一人の老僧山本玄峰が、田中清玄・四元義隆・井上日召という昭和史きつての武闘派たちを御し、その全部を戦争終結のエネルギーに転化させていたというだけでも、龍澤寺に充満した人格力とその凝集性は、我々研究者が通例想定する「世間」というものからみて桁外れの水準に達していたといわざるをえない。この世界は、個人の人格力およびその凝集性においておそらくは近代日本史上においても度外れた水準に達していたと評価しうる。玄峰の影響を受けた人物が、戦後の国際政治史においても重要な局面に関与した事実を踏まえるならば、その人格的凝集力の威力は日本国内を超えて世界史的気脈をも有しうるものであったと考えられる。

龍澤寺の存在は極めて興味深く、右に挙げた諸論点も、より詳しく研究を進めるならば、それぞれゆに一論考を形作るであろう。また前近代についても非常に重要な史料が膨大に存する。近代のみならず前近代

も含めて今後研究を進めていくならば、充分に一冊の研究書籍となるであろう。龍澤寺史の研究はこれからであると言わなければならないのである。

注

(1) 本論に用いた主要参考文献の書誌は左記の通り。

① 山本玄峰について

山本玄峰『無門関提唱』大法輪閣、一九六〇年。

高木蒼悟『玄峰老師』大蔵出版、一九六三年。

玉置弁吉編著『回想 山本玄峰』春秋社、一九七〇年。

「山本玄峰老師」三島市誌増補版編さん委員会編纂『三島市誌』本文編増補、三島市、一九八七年。第一章人物4所収。

帯金充利『再来 山本玄峰』大法輪閣、二〇〇二年。

※帯金書は適切な記事の抄出とともに玄峰の生涯の要点をまとめており手頃であるが、多少創作めいたところがある。傑僧の伝説化であるから受容史としては興味深いが、玄峰の歴史の実像の解明に役立てることは難しく、注意が必要である。

帯金によれば玄峰は宗舜自死を契機として「成仏の法」を見出したとされる(二一九―二二一、二四四―二四九、二四九―二五〇、二九四―二九五、三二〇―三二三、三三四―三四〇頁)。それは帯金の描く玄峰の最高到達点であるのみならず、事実であるとすれば玄峰による極めて重要な到達点の記事であるが、他書に記載が見えない。

そこであらためて検証すると、右エピソードの構成個所のみはすべて出典記載がなく、創作の疑いを捨てることができない。帯金の描く玄峰像は、他者の死により自己の精神を省察するという意味で近代

的自我の悩みであり、禪者として人間を見抜いて鋭い対機説法を行う玄峰の姿から考えても違和感がある。そのため姑くこれを除かざるを得ない。

② 中川宋淵について

中川宋淵『詩龕』詩龕堂、一九三六年。

中川宋淵『命篇』私家版、一九四九年。

中川宋淵『遍界録・古雲抄』龍澤寺、一九八二年。

中川宋淵『法光寿』龍澤寺、一九八五年。

中川宋淵『空華』龍澤寺、一九八六年。

鈴木宗忠ほか『蜜多海月情』龍澤寺、一九八七年。

鈴木宗忠『蜜多余香』龍澤寺僧堂、一九九〇年。

東京大学陵禅会六十年史編集委員会編『明暗双々 東京大学陵禅会六十年史』ぺりかん社、一九九五年。

③ 山本玄峰・中川宋淵の双方に互るもの

江本宗昭『夢のごと 明るき山の 蟬しぐれ』——植松宗家と玄峰老師・宋淵老師』私家版、二〇〇四年。

④ 関係者の回想等

(ア) 田中清玄

田中清玄『統治者の条件——日本人は何をなすべきか』情報センター出版局、一九八三年。

田中清玄『世界を行動する』情報センター出版局、一九八三年。

田中清玄『田中清玄自伝』ちくま文庫、二〇〇八年。

大須賀瑞夫著、倉重篤郎編『評伝田中清玄——昭和を陰で動かした男』勉誠出版、二〇一七年。

徳本栄一郎『田中清玄——二十世紀を駆け抜けた快男児』文藝春秋、二〇二二年。

(イ) 四元義隆

金子淳一『昭和激流 四元義隆の生涯』新潮社、二〇〇九年。

四元義隆聞書「総理の指南番「宰相とは何か」を語る」『経済往来』三七卷一二号、経済往来社、一九八五年一月。(以下「四元聞書(注1③(イ))」と略記)

(ウ) 井上日召

井上日召『一人一殺 血盟団事件首謀者の自伝』河出書房新社、二〇二三年。

⑤ 妙心寺派および龍澤寺史

妙心寺開創六百年記念雪江禪師四百五十年遠譚大法会局編『妙心寺六百年史』妙心寺開創六百年記念雪江禪師四百五十年遠譚大法会局、一九三五年。

川上孤山著・萩須純道補述『増補妙心寺史』思文閣、一九七五年。

藤田和敏『悲劇の宗政家前田誠節——臨濟宗妙心寺派の近代史』法蔵館、二〇二一年。

臨濟会編『昭和・平成禅僧伝 臨濟・黄檗篇』春秋社、二〇〇〇年所収「龍澤僧堂」

(2) 小田直寿『家永三郎の思想史的研究——その生涯・学問・実践と「否定の論理」』日本評論社、二〇二四年。

(3) 書誌についてはいずれも前掲注1参照。

(4) 『悲劇の宗政家前田誠節』「おわりに」。

(5) 『増補妙心寺史』所収萩須純道「明治以降の妙心寺」参照。

(6) 『妙心寺六百年史』五四五頁。

(7) 『山本玄峰』五八頁。

(8) 第八世に至る沿革については妙心寺派宗務本所総務部編『昭和改訂正法山妙心禅寺宗派図』大本山妙心寺、一九七七年。六一四—六一五頁参照。

(9) 『玄峰老師』五四—六五頁。

(10) 同五四頁。

- (11) 『玄峰老師』六一頁ならびに建長寺史編纂委員会編『建長寺史』末寺編、建長寺、一九七七年。五七五頁。
- (12) 『玄峰老師』五五頁。
- (13) 同六四、一九九―二〇二頁。
- (14) 広島県立広島国泰寺高等学校百年史編集委員会編『広島一中国泰寺高百年史』母校創立百周年記念事業会、一九七七年、三三〇頁。
- (15) 『詩龕』序品。二頁。
- (16) 『詩龕』所収「陵禪会私記」。「西寮大煙突上（中略）指頭一度此の鉄鎖を離さば、落々磊々、生死去来棚頭の傀儡に似て何ぞ易々飄々たるや。正に身を翻し、此れが実験にとりかゝらんとして、慄然色を失ひ地に下りたりけり。（中略）妙義の岩を攀ぢては、紅血一閃化しすらんと再び死神の誘ひを受け」とある。
- (17) 柴生田稔『思い出す人々――わが点鬼簿より』短歌新聞社、一九九二年、一九四頁。
- (18) 「松井定之・略歴」松井定之ほか『能の観賞』大槻清韻会、一九八四年、二五二頁。
- (19) 『懸葵』第三四卷七号（通卷三九五号）、懸葵発行所、一九三七年七月、七四頁。
- (20) 志田延義『志田延義エッセイ・シリーズ6（爪立ち人生）』至文堂、一九九九年、五七頁。
- (21) 河野一之『財経凹凸鏡』財務出版、一九七五年、一一七頁。
- (22) 大蔵省印刷局編『官報』一九二七年四月二七日、日本マイクロ写真、一九二七年、七三五頁。
- (23) 東京帝国大学編『東京帝国大学要覧』昭和二至三年、東京帝国大学、一九二八年、三四三頁。
- (24) 前掲志田『志田延義エッセイ・シリーズ6（爪立ち人生）』五六頁。
- (25) 同五六頁。
- (26) 『法光寿』所収「俳句と私」一八〇頁。
- (27) 『詩龕』附龕「附録第一連句集」。
- (28) 『東京帝国大学一覽』昭和五年度、東京帝国大学、一九三〇年、五五一頁。

- (29) 同四五四頁。
- (30) 山本光「宋淵老師のお若い頃」『蜜多余香』八頁。
- (31) 『明暗双々』書誌は前掲注1の②参照。
- (32) 赤津好一「塩山の宋淵老師」『蜜多余香』二二頁。
- (33) 同右。
- (34) 飯野燦雨「俳禅一如——中川宋淵における季語」『雲母』七〇号（通巻八〇七号）、雲母社、一九八四年二月、二三頁。ただしこの発言は引用であり、出典は現時点で不明である。
- (35) 『法光寿』所収「俳句と私」一八〇頁。
- (36) 同二二五頁。
- (37) 同二二五頁。
- (38) 赤津好一「塩山の宋淵老師」『蜜多余香』二二頁。
- (39) 笠原承彦「龍澤僧堂開單のころ」『蜜多余香』二九頁。
- (40) 『玄峰老師』所収「宗舜和尚」二〇一頁。
- (41) 同二〇二頁。
- (42) 前掲笠原「龍澤僧堂開單のころ」『蜜多余香』三〇頁。
- (43) 同頁。
- (44) 加藤幸助「玄峰老師のことども」『回想 山本玄峰』六二―六三頁。
- (45) 『無門関提唱』三一五―三一六頁。
- (46) 同九七頁。
- (47) 同二九一―二九三頁。
- (48) 同一七八頁。

- (49) 同二九七頁。
- (50) 同三一〇頁。
- (51) 田中清玄「玄峰老師言行録」『回想山本玄峰』一〇五頁。
- (52) 『一人一殺』八二頁。
- (53) 同一九一―一九九頁。
- (54) 『玄峰老師』一九六頁。
- (55) 同一九八頁。
- (56) 『玄峰老師』二六六―二六七頁。
- (57) 前掲笠原「龍澤僧堂開單のころ」『蜜多余香』二八頁。
- (58) 『一人一殺』二七八―二七九頁。
- (59) 乙竹あい『父、御木本幸吉を語る』御木本グループ、一九九三年、一八七頁。
- (60) 平井玄恭『仏道は人の道——正法眼蔵隨聞記講話』関の会、一九九三年、一四九頁。
- (61) 『田中清玄自伝』二七一―二一八頁。
- (62) 同一九九頁。
- (63) 同二一八―二一九頁。
- (64) 『統治者の条件』二四―二五頁。
- (65) 以上、『世界を行動する』二二八―二二九頁。
- (66) 四元聞書（注1③（イ））八四頁。
- (67) 田中「玄峰老師言行録」『回想山本玄峰』一〇六―一〇七頁。同『統治者の条件』二一七―二一九頁。四元聞書（注1③（イ））八四頁。玉木弁吉「玄峰塔について」『回想山本玄峰』一六頁。
- (68) 同頁。

- (69) 『統治者の条件』 一一七頁。
- (70) 四元聞書（注一③（イ）） 八四頁。
- (71) 『統治者の条件』 一一八―一一九頁。
- (72) 四元聞書（注一③（イ）） 八六―八七頁。
- (73) 田中清玄「玄峰老師言行録」、『回想山本玄峰』 一〇七頁。
- (74) 以下の記載は、櫛橋渉「老師と新憲法秘話」、『回想山本玄峰』 一〇七頁、『田中清玄自伝』 一三六―一四二頁、『評伝田中清玄』 二四七―二六三頁より概要を整理したもの。なお『憲法調査会総会議事録』第三委員会報告書には「この事実が『象徴』の動機となつたという証拠はないようである」（六頁）とあり、裏付けの確認が俟たれる。
- (75) 前掲笠原「龍澤僧堂開單のころ」『蜜多余香』 二九頁。
- (76) 『命篇』 二九、三四頁。
- (77) 木村行蔵『自然・人生・職場』警察図書出版、一九五八年、一三六―一三頁。また同「天恵多き裸族に野蠻の尊称」菅原通済『馬鹿と利巧』明玄書房、一九五九年にも同様の記載がある。
- (78) 山本玄峰『無門関提唱』 三四一頁。
- (79) 嶋野栄道「千崎如幻師と宋淵老師の交流」『蜜多余香』 一〇六頁。
- (80) 末村正代「千崎如幻の後半生と欧米人來日禪修行——円福寺 Zen Hospice の設立と三宝教団修行ルートの確立」『南山大学宗教文化研究所報』第三三卷、二〇二三年、六四頁。
- (81) 前掲末村「千崎如幻の後半生と欧米人來日禪修行」前掲誌六二―六六頁。
- (82) 前掲笠原「龍澤僧堂開單のころ」『蜜多余香』 三〇頁。
- (83) 中川宋淵「アメリカ行脚（一）」『雲母』三八八号、雲母社、一九四九年七月号、二八頁。および同誌三八六号、一九四九年五月、四九頁。

- (84) 藤井修平「仏教は西洋でいかに変化したか——ヨーロッパの禅を中心に」『中央学術研究所紀要』四八号、二〇一九年、五四頁。
- (85) 島野栄道「勝縁曼荼羅——棚橋秋旻大姉のこと」『禅文化』一五三号、禅文化研究所、一九九四年七月、四四頁。
- (86) R・J・ツイウエルブロスキー「イスラエルの弟子として」『蜜多余香』八六頁。
- (87) 島野栄道「千崎如幻師と宋淵老師の交流」『蜜多余香』一〇八頁。
- (88) 『昭和平成禅僧伝』「龍澤僧堂」一八七—一八九頁。
- (89) 中川宋淵「玄峰老師年譜普説」は『回想山本玄峰』に記載がある。
- (90) 前掲江本『夢のこと 明るき山の 蟬しぐれ』二七四頁。
- (91) Kazuaki Tanahashi and Roko Sherry Chayat, comps. and trans., *Endless Vow: The Zen Path of Soen Nakagawa*, introduction by Eido Tai Shimano (Boston: Shambhala Publications, 1996), 35-37.
- (92) Tanahashi and Chayat, *Endless Vow*, 44.
- (93) 『昭和平成禅僧伝』「龍澤僧堂」一八七—一八九頁。
- (94) ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア著、エイミール・イズ・ツジモト訳『禅と戦争——禅仏教の戦争協力』光人社、二〇〇一年、一三三—一三四頁。
- (95) 市川白弦「宗教者の戦争責任を問う」『市川白弦著作集』第四卷（宗教と国家）、法蔵館、一九九三年、四〇—四六頁。
- (96) 右二書のほか、水田全一『戦闘機臨済号献納への道——【検証】臨済宗の戦争協力』ウインかもがわ、二〇〇一年。四七—四八頁参照。ここでは山本玄峰の新京別院への着任が「植民地での『教化報国』」の一環として位置づけられる。
- (97) 山本玄峰『無門関提唱』三一五—三一六頁。

(8) The Zen Studies Society 浄土会 “A Statement on Eido Shimano Roshi” 参照。

<https://zenstudies.org/a-statement-on-eido-shimano-roshi/>